



ハタラクヒト

* ペディア 9

< 和田英士 氏 >

田中永子

はじめに

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はNLPやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだろうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

研ぎ澄ます・・・心に新選組の羽織をまとう カメラマン 和田英士 氏

記念すべき 第9回は、

Work+Ride（わーくあんどらいど）の代表でいらっしゃる 和田英士 さんです。

和田さんは、社会に出てからコンピュータ業界、飲食業、土業の会社での勤務を経て、現在は Work+Ride にて、おもに広告写真や個人写真撮影、デザインのサービスを提供なさっています。

和田英士 氏



Work+Ride

おもに広告写真や個人写真撮影、デザインを提供しており、
会社のモットーは 『ともに成長していく媒体の提供』 を真心こめて。

趣味：ロードレーサー、音楽鑑賞。

休日はロードレーサーでロングライド、ギネスとともにパブで楽しむ。

好きな本：逝きし世の面影（渡辺京二）、松下幸之助の哲学（松下幸之助）、ざっくばらん（本田宗一郎）。

好きな音楽：アイルランド・スコットランド・北欧。

連絡先：Work+Ride

電話番号：080-3686-5920 050-5539-7251 052-308-3848

メール：chris814pix@gmail.com

◆分析して掘り下げていくアプローチ

和田： 話しながら、他の人たちの会話も、両方聞ける。ぼくの周りの人は。

田中： 入ってきますね。

和田： なんかその、こういうふうに繋いでしまうと抜けるんだけど、繋がずに広い状態にしとくと、全部聞ける。そういう感じですね。

田中： で、そこでチューニングしたり、合わせてく感じ？

和田： たぶん、全部は聞いてないけど、要所要所、なんかのキーワードは耳に入ってくる。

田中： そのキーワードもきっと、個人であるんですよね。

和田： そうですね。

田中： 和田さんなりの。カメラ、自然とか。そういうのも結構入ってくるんですか？

和田： 敏感というか、なんか仕事柄かもしれません。ぼく、カメラの先生がいないんです。

田中： うん。伺ったおぼえあります。

和田： 先生がいないので、いろんなお客様が「他の人は、こういうことしたよ」っていうこととか、「前はこうだったかな？」ってことは、凄まじいヒントだと、ぼくは思ってるんです。聞き逃せない一言は、きっとそこら中に散りばめられてるんで、その瞬間の集中力たるや、凄まじいですよね。「あ、今もう一回。メモします」ってことはないです。全部頭に入れちゃう、一気に。

田中： すっごい。

和田： だからぼくは、昨日も話したんですけど、ひとつの能力だなんて思うのは、取材先で写真撮りに行ってるのに、ライターや記者の人が聞いているスピーチの内容は、録らないのに全部覚えてるんですよ。

田中： レコーダーっぼく。

和田： だから、「こういうシチュエーションでしゃべったな」、「この時、こういうことあったな」が、動画のように頭の中に入ってて。

田中： 画も残ってるの？

和田： 画も残ってます。その時の、「ここに、これがあってこうなった」とか。

田中： DVDっばい。

和田： ぼくなってますね。

田中： 私、昔は絵的に、本とか新聞とかパッと開いて。パタンと閉じて「何書いてあったかな？」って思うと、その紙面がそのまま浮かぶ.....みたいな。

和田： 速読と同じパターンですね。

田中： うん。まあそんな感じで。最近衰えたんですけど（笑）。

和田： あははは。速読の本の方々って、そうですもんね。だから、目、通さないですよ。全体を写真として、撮っちゃう。で、そうやって言われる、「あそこのあの辺にあったのは、こういうの」

田中： そうそうそう。

和田： っていうふうに。で、文章とかも出てくるんですよ。ぼくはもっとアウトラインで物事を捉えてて、音声とかは特に入ってくるんですけど、文字とかは入ってこないですね。で、天才の人たちは、これが顕微鏡レベルまでいって掘り下げるんで、拡大率が違います。

田中： あの、NLP的にいえば、優位感覚っていうのがあって。

和田： 優れてる感覚？

田中： うん。どの感覚が発達してて、情報処理をする時に、どの感覚がやりやすかったっていうのに近いんだけど、ビジュアル（視覚）とオーディトリー（聴覚）とキネスティック（体感覚）。和田さんは典型的な、オーディトリーですよ。

和田： そうすね。

田中： 学力上げるには、V（視覚）が優位らしいんだけど。

和田： あー。

田中： 英語とか。語学とか、理論的に分析したりっていうことになると、A（聴覚）が一番。私、覚えてるんだけど、以前、写真撮っていただいた時に、「先生がいらっしゃらないのに、どうやって勉強したの？」ってお聞いたら、ポスター見た時に。

和田： 分析してく（笑）。

田中： そうそう！「光がどっちから当たってるのか？距離はどれくらいなのか？角度はどうなのか？そうしたことなんかを、見て勉強した」っておっしゃってて、「すげー！」って思ってた、覚えてたんです。

和田： はい。あいかわらずですね。それが今も変わらない。

田中： うーん。

和田： で、あいかわらず、見て。「なるほど、ここはこうか」とか。で、ようやく最近、謎が解けたヤツがありますね。建築系は最近、いっこ解けて。

田中： え、どういった謎だったんですか？

和田： レンズが特殊なんだよね。で、それで広く撮ろうとするんだけど、普通だとギューンって、近いところはもの凄く大きくなって、遠いところはもの凄く小さく撮ろうとするのね。

田中： あー。

和田： で、「なるほど。だからこう変わるんだ」っていうのが入って、今日アシスタントさんに教えたんですけど、「全然わかんない」って（笑）。だけど、こうするとなんかわかんないけど、バランスがよくなる。その裏付け、理論は比率。縦横の比率が分かっているから、そこにはめ込もう、はめ込もうと感性で走ってるんだけど、はめ込めない状態が、ずーっと続いてて。内観ならそれでもいいのに、外観になると無理だになってというのが、ようやく解消されてきたんで。

田中： それ、何年前くらいから？

和田： 3.....年くらい前から（笑）。

田中： きっと本とか、いろいろ研究はされてたと思うんだけど。

和田： そうですね。

田中： そのヒントが、来たんですね。

和田： やっと来た。

田中： それは、なにかのきっかけ？

和田： きっかけですね。これまで「上下か左右にしか動いちゃいけないもんなんだ」って思ってたのが、思い込みで。「斜めもいいんだ」って（笑）。

田中： そこまでのモノっていうのは、セオリー的に、こうなんだなってあるけども、最後の決め手は、やっぱり.....？

和田： 自分の感覚なんです。自分の感覚に、ハマりますね。たぶん、それが見慣れてる美しいって思う比率に近づけてるはず。で、家に帰ってパソコン開いた時に、その感覚が思ったように撮れてない時があるのね。そうするとパソコンで再度処理をかけて、美しくみえる比率に戻す。

田中： うーん.....っていうことは、和田さんの中に、構図として、美しいっていう角度っていうものがちゃんと.....？

和田： 存在してます。

田中： 存在してて、そこに当てはめる。

和田： 人にも人間にも、存在してます。だから「顔をもう少しこっちに向けてくれると」というのは、そういう感覚で誘導してるんですね。それは目が離れてるとか、顔のパーツが全部寄ってるとか、そうなる髪でここを隠せば、ぼくが美しいと思う顔のバランスに変わっていく。それに、常に近づけていく。

ただそれでも、相手あつての商売なので、その人はどこの部分がコンプレックスで、ここは撮っ

て欲しくないだろうとか。こっちには傷があるけど、こっちにはないとか。そうするとライトが逆転すれば、こっちは影になるから傷が見えなくなって、きれいな方が明るくなる。だったらこっちから撮った方がいいかなってなる。

田中： そっか。なんか膨大なデータが入ってる感じがする。

和田： ただほんとにすごくシンプルで、三平方の定理みたいな、 $X^2+Y^2=Z^2$ みたいな、ああいう感覚ですね。そこの方程式にはめてしまうだけ。そのパターンが、基本3種類くらいあって、その3種類にはめちゃえば、大概是、いけるって感覚になってます。

田中： それは、いつぐらいから出来始めたの？

和田： いつなんだろう。……3年ぐらい経ってから、2年前ですかね。たぶんちょうどお目にかかったぐらいの時から変わって。ようやくそういうところ分かるようになって。やっぱ今見ても、当初の写真を見ても、人の写真はまだ許されるんですよ。それは大丈夫なんですけど、建物とかまだまだでしたね。

田中： あははは。

和田： つまり、構図に当てはめてくところが上手く出来なかったのは、外観に関してね。内観に関してはもう1年前、2年前に撮れるようになってるけど、4年前とかになると、かなりヤバいわけですよ。勉強途中なもので……パソコン開いた時に……（爆笑）。

田中： あははは。

和田： ただあ、圧倒的にコンピューターで直せる技術力が格段に上がってるんで。

田中： 和田さん自身が？

和田： うん。ぼく自身。それを見た時に、何をすると、この写真が、お客様に「いいね」って言ってもらえるように変えられるかっていうのが分かっちゃってた（笑）。

田中： うんうん。

和田： 自分の中では、10点もあげられんなって（笑）。100点中ですよ。それがコンピューター入れれば、85点位まではいける気が（笑）。

田中： 凄いつ。凄くないですかあ。

和田： あはは。例えば、ケーキで片方が崩れちゃった。でも、全体を見せようとするから、こっちがイヤになるわけで。いや、こんなに大きなケーキじゃなくてもいいじゃん。「半分にしちゃえ」と。

田中： うん。

和田： むしろホールだから、だめなんだ（笑）。「四角にしちゃえば、いいじゃないか」って、そういうことが自分の中で許せるような感覚が出来てたんだよね、今は。

田中： 許せるってことなんですね。

和田： ホールじゃなきゃいけない。Have toで思うのか、スクエアでもいいとか。ケーキはホールであるべきだとか。「～じゃなきゃいけない」と思うと、ダメなものになるじゃないですか。ロクロを回すように、円をどんどん小さくして行って。それとも削ぎ落としてスクエアにしていくな。三角にするとか。六角形でもいいよね、とか。

田中： 選択肢が増える。

和田： 選択肢が増えるよね。円であるということは他の図形もこの中に、数多く内包されてるわけだから、ひし形でもいいじゃないか、とかいうように、変えられるような余裕というか、意識があるわけですよね。さっきの話、見方を変える。「円の中に何があるかな？」って。円にこだわりがなくなってる。

田中： だけど、撮りたい構図は決まってるのね。

和田： 決まってる。その当時は、それが、ものがなかったから。

田中： その撮りたいっていう。

和田： 「こうなるのが美しい」という感覚は持ってたけど、技術力が足りなくて、たどり着けてなかった、確実に。今はそれがほとんどなくなって来てる。1年とか、1年半くらい前の広告写真を見ても、非の打ちどころがない写真もあるんですよね。

田中： うん。

和田： 「バランス、いいわー。しっかりまとまってる、これは長く使えるな」 って。

田中： こう、普遍的な。

和田： そうですね。自分の中での感覚が全部網羅された状態になってて。「もうちょっとここ、こうだったかな」 っていつも絶対思うんですよ。だけど、それがその写真に限ってはない。自分ではまだ言えないですね、それに対する非は。

田中： うん。

和田： それだけ確立されたものが、全部収まってて。

田中： それ撮れた時、めっちゃテンション上がりますね。

和田： もう、テンション上がりましたね。「やっと、やっと」 って。あははは。

田中： あははは。

和田： （笑）3年半ぐらいですもんね。開業してから、3年半かけてやっと描いた通りのものが、出来た。何万枚どころじゃないですよ、何十万枚撮ってきて、やっとですもんね。

田中： それが、生まれたときって、どんな。こう、その写真に臨む時になにか、向かっていた時の気持ちとか。

和田： あー。

田中： そうなのって今までと違うとか、なんか、あったんですか？

和田： 肩の力が抜けてたのは、間違いありませんよ。もう、自然に撮れた感じ。普段すごいがんじがらめに考えるんですよ。もの凄く緻密に考えてて、「あの図形、この理屈のこれでいくと、ここはこうはまってる。だけど、ここはだめだ」 とか全部考えてて。

田中： うん。

和田： で、ダメなところといいところが、全部出てきて、カメラを振ってくと、「ここでこうなる、違う。これだ、これだ」 みたいなのが出てきて、その中で自分での平均点が一番高いやつで、写真を撮るっていう癖があるんですよ。住宅とかだと。

田中： うんうん。

和田： で、ある種、妥協がずっと連続するわけなんですけど。

田中： 平均点ですもんね。

和田： 平均点だから。だけど、その時は、もう全セオリーがどれ入れてもバチッとはまる感じで（笑）。なにも問題はなくて、周りも「いいです。すぐOK」って感じで。ほぼ一発OKみたいな写真だったんですよ。

田中： 奇跡的な感じ。

和田： 奇跡的な感じだったですね。ディレクションする方が、結構委ねてくれてたっていうのと、出てるキャストの皆さんとの意思疎通も割と出来てたんで、思い通りにスムーズに、何もかもがいったわけです。みんなの結晶だと思ってますけど、ぼくの技術ではなくて。みんなの結晶での一枚は凄くまとまっているなど。

田中： なんか、そういう時って、なにかの加護があったんじゃないかって。

和田： あー、ありますね、そういうのも。けして、調子がいい日じゃなかったと思う（笑）。うん。身体的な要素でいうと。

田中： うん。

和田： スケジュールが詰まりすぎてて、むしろしんどいぐらいの日程だったと思いますけど。ぼく、さらにいうとスロースターターなんで、前半は結構（笑）。

田中： ふふ。 のんびりされちゃう？（笑）

和田： 入り乱れるんですよ（笑）。意識が乗ってこない。

田中： あははは。

和田： ターボ車的なんです、凄く。

田中： あー。

和田： ふふふ。サーキット一周、練習走行して、「タイヤもあつたまつたし、そろそろ本番いくかー」って（笑）。そんな感じでいくといいんですけど、なかなかそうは普段いかないんで、いきなり、もう、「ぶん回して行こうぜ」っていうのが、普段の仕事だから、エンジンが疲れちゃいますよね。

田中： うん。

和田： 元々あつたまつてからじゃないと動けない人間なのに、あつたまる前から吹かし始めちゃうから壊れやすい。F1に喩えると、そんな感じ。

田中： へええ。その状態だったのに、その写真が撮れた。

和田： 撮れたっていうのが、ほんと疑問。まあ、周りもよかったっていうのもありますし、アシスタントに絶大な信頼を置いてた。ぼくよりも先輩のカメラマンにアシスタントしてもらうとか、仲のいいキャストばかりだとか。

田中： 安心して。

和田： 安心してやれた。

田中： へええ、凄いなあ。

和田： 嬉しかったですね。

田中： 嬉しいですよ。そういう状態で、そういったものが生れたのって、凄い糧になりますね。

和田： 糧になりますねえ。すごい自信になります。

田中： スロースターターなのに、「こんな写真撮れちゃったー」みたいな（笑）。

和田： 「撮れちゃったー」（笑）。あはは。ほんとに（笑）。

田中： キャパがひろがる感じですね。

和田： そうですね。ほんとに、なにが起こるか分からないし、その場その場での100点、1

20点、200点、常に狙うので、「これに足りないものは、何か？」とか、疑問を自分に常になげかける。

自分が自分でないような感じもあるし、自分の周りに自分の敵もいっぱいいて、「おまえ、これは大丈夫か？」みたいなずーっと言われる感じで、頭の中でずっと。じゃあ、それをひも解くためには「どうすればいいか？」っていうのを、いつも意識して改善してく……みたいな。

田中： 頭の中が、常にフル回転してる。

和田： ですね。撮影中はそんな感じですね。リラックスして撮ってない時も、多いですね。

..... つづく ^^

◆プレッシャーの中でナチュラル・ハイに持っていく

田中： 前回は「自分に負荷をかけることが必要で、プレッシャーの中で実力を出すことが、素晴らしいんだ」ってことを言ってらした気がするんですけど。

和田： そうですね。

田中： いかにして力を出すのか……みたいなの。

和田： はい。ナチュラル・ハイって、プレッシャーがないと、ナチュラル・ハイにはならないと思ってて。

田中： うん。

和田： プレッシャーがない中で、テンションが高いっていうのは、単に楽しんでるだけっていうのか……。でも仕事である以上は、ある程度緊張感が必要で、その緊張感の中でないと、120点とかは出せない気がするんですよね。

田中： うん。

和田： 遊びでやってしまうと、いけて80点。お金をもらうという点においてですよ。遊びでやって、めっちゃいい写真が撮れるのは当然あるけど、それがお金貰えるかっていうと、別の話でね。作品としては。

田中： 凄く……強さっていうのかな。

和田： 厳しさ？

田中： うん。とっても、あたりとかも柔らかいんだけど、ご気性というか、とっても剛毅なんじゃないかなって。

和田： ああ。そうですね。変な話、「もっとこうの方がいい」なんていうのは別れてから始まるんですよ、お客さんと。

田中： うん。

和田： 昨日撮ったお写真を、昨日処理できなかったの、今晚帰ってパソコン開いた時に、い

ろいろ気づく点がたぶん出てくると思うんですよね。「髪、もう少しこうしといた方がよかったな」とか。

田中： うん。

和田： 「この話をした時、この表情されたから、もっと掘り下げたほうが良かったかな」っていうのが、パソコン開いてから始まるんだよね。

田中： ふふふ。そこから、始まるんですね。

和田： ええ。それを忙しい時に、アシスタントにお願いしちゃうと、ぼくには復習の時間がないんです。そうすると、今までのクオリティで120点確実に取れてきたのが……そういう現場の背景を汲み取りながら、自分の気づく点、気づかない点を後でフォローアップして、そこに昇華するんですけど、それが出来ないから100点のままで終わっちゃう。むしろ下がっちゃう時もないわけじゃないかなって。

田中： と、思ってたっしやる。

和田： と、ちょっと悩むところですよ。

田中： 私、今ワンピースの作者の『尾田栄一郎（おだ えい いろ）』さん。あの人思い出してる。

和田： ふうん、そんな感じなの？

田中： あの人には連載持ってて、週刊誌じゃないですか、結構大変ですよ。

和田： 大変ですよ。よく休んでますから、最近。

田中： そうそうそう。だからワンピースの連載も、彼の体調が一番心配じゃないかって（笑）。

和田： あはははは。

田中： 最終回まで行きつけるかどうかって。

和田： 『こち亀』とかみたいに、いかないですからね。

田中： うん。ちょっと力の入り方が違う感じがして。周りの人とかは、尾田さんに「描き込みとか力の入れ具合をセーブしたら？」みたいな感じでアドバイスするらしいんだけど、尾田さんは、「土壇場に追い込まれた時の馬鹿力具合が、作品を面白くするっていう、それが捨てられない」みたいな。

和田： あはははは。だけど、それを小学生が3週間も我慢して（笑）またジャンプ買ったけど、「載ってないがや」みたいなので、どうかなって思うところもありますしねえ。

田中： だからね、プロとしてね、提供して行くっていう、兼ね合いの難しさもあるんだけど。

和田： そうですね。

田中： そういう話をされてたのを、なんか今思い出した（笑）。

和田： こち亀の秋本治さんも、比較的そういうスタンスは持っていて。

田中： うん。

和田： ただ、彼はマルチなタレントで、両津勘吉のスーパーマルチは、ある種、彼自身なんですよね。

田中： うん。

和田： 両津は秋本治そのもので、昭和の情緒あるマインドも持ちつつ、ギャンブルも好きだし、物もマニアだし……みたいな。何やらしても、というところを表現している。車が得意なアシスタントと、人が描くのがうまいアシスタントとか、みんなバラバラでいるはずなんですよね。

田中： ええ。

和田： その分だけ彼の周りにはブレーンがいて、たぶん、「次号はこれで行こう」とかある程度決まっただけでも、変えてると思うんですよ。

田中： カスタマイズしてね。

和田： カスタマイズして。「50号はこれで行こう。車で行こうって決めてただけで、いや、なんか時代背景からすると、どうやらマグロのほうがいいかもしれない」とか（笑）。

田中： マグロかぁ（笑）。

和田： 「iPadとか、アップルの話になってくるぞ」とかで、一応もう伏線は張ってあるんですよ。だから、それがすぐ、パッと臨機応変に出来ちゃうところが、クオリティはそのままにやれるっていうのがね。……目指すのは、こっちです、ぼくは。

田中： そっちなの？

和田： はい。

田中： 秋本さん？

和田： 秋本さん。

田中： 確かにね、目指すところがちょっと違う感じがするの。秋本さんは、もうギネスに載ってるのかな？

和田： 載ってると思いますよ。200巻とかいっちゃうんじゃ（笑）。

田中： あれを「いかに更新していくのか？」というところに、焦点が当たってるんだけど、尾田さんは違うもんね。熱いものがあるって。

和田： そうですね。

田中： それを「表現したい」みたいなのところがあるから、一緒に冒険してる感じが。

和田： うん。確かに。

田中： 秋本さんは、少し離れてる……。

和田： そうですね。時代を横から見てる、斜めから見てる、上から見てる、下から見てる、みたいな。常に視点を切り替えるだけの、マルチビジョンなんで、彼は。

田中： うん。

和田： ストーリーの中に引き込むっていうのは、たぶん80巻くらいまでで終わってて。

田中： うん。 そうそうそう。

和田： なんか、変わってってるんですよね（笑）。

田中： そう。 私、最近読まないのは、モノの紹介みたいな感じになって来てて。

和田： なってきてますね。

田中： その時代の時に、さっきおっしゃったみたいに、マグロだったら、マグロについての背景とかがストーリー仕立てで語られてるみたいな感じで。「別に両さんがしゃべらなくてもいいじゃん」みたいな。

和田： 「それガイアの夜明けでやってるよ」 っていうのが、ジャンプの中で始まって、みたいな（笑）。

田中： そうそう。

和田： ま、その辺、30巻ぐらいまでがゴールデンっていう人が多くって、30～40巻辺りの描写が『こち亀』の骨頂だよって（笑）。 あそこが根本だから、読まなきゃみたいな（笑）。

田中： うん。 最近はそんな感じになってしまったので、読まなくなっちゃって。 ワンピースも熱すぎて、最近読まないかな（笑）。

和田： あははは。 ワンピースは、ぼく、読み切りで出た頃のヤツをまだ覚えていて。

田中： 連載前の？

和田： 連載前の。 シャンクスの腕がなくなる話が読み切りでした、確か。 悪魔の実を誤って食べちゃうシーンなんですけど。 あの時に、「これは、いける」 と思ってた小さい頃があって。 小学生、中学生の頃かな。

田中： その「いける」 っていうのは？

和田： あ、売れる。 この漫画は面白い。「絶対これから読みたい漫画だ」 と思ってたから、今これだけ世界に広がったのを見て、嬉しい。 あははは。

田中： あははは。「先見の明、あるよ」みたいな（笑）。

和田： そんな感じ（笑）。「やっぱり、来たな」って。それに対して、先見の明っていうよりは、「これはみんなに見てほしい。いい漫画だから、知ってほしいな」って感じ。

田中： インディーズで、「これ売れるぞ」みたいな。

和田： そうですね。もう目えつけて、「やっぱりね」っていうのが、嬉しかった。

田中： そうかぁ（笑）。

和田： 絵のうまさとか、タッチとか、今どきで言えばワクワクとか、そういう何らかの擬音みたいなものが入ってた。今更ながら分析すると（笑）。ページ数も50ページとか長くて。海賊ものなんだけど、子供じみてなくて、大人すぎてもなく、雰囲気も良くて、これから先のストーリーが読みたくなる感じ。

田中： うん。

和田： そういうのが、いっぱい詰まってるんですね、そこに。

田中： 今見ると、そういう要素が全部入ってるんだなあって。

和田： 入ってるんだなあって。連載が始まった時に、それを思い出して、「読みたいヤツだったから、嬉しいな。集英社、やるじゃん」みたいな（笑）。

田中： あはは。

和田： あはは。こち亀も同じで、新人賞とって連載にいきなり入ってるはずなんですけど。たぶん、23～24歳の頃に、秋本さん、描き始めて。ぼくより、歳大きいから。親の年くらいですよ。

田中： 連載も長いですね。

和田： 長いし。それだけの年数、他の事をせずに、漫画だけでいきなりギネスに載ってきた人って、そんなにたくさんいないと思うと、その魅力、時代時代をうまくシフトしてきながらも、『こち亀』たる要素を僅かながら匂わせるところは、うまいなあと思いますね（笑）。

田中： 割合を変えてったって感じですね。

和田： そうですね。昔は劇画タッチで、ピストルバンバン撃つとか（笑）。

田中： 笑

和田： 今は寿司屋もやってる、なんだかんだって。

田中： ですね。車も売ってましたし。

和田： そういうマルチな要素で、昔は警察官らしかったような感じだったけど、今まで通りにやっては、読み手がもっと減ってくだらうというのは、秋本さんのたぶん明で、それが間違っていないから、ぼくは読んじゃってて。

田中： うん。

..... つづく ^^

◆写真を撮る時に基本にしているのは、伝統であり絶対的な美のパターン

和田： ぼくも写真を長くやって行きたいのか、いい写真を残したいのかって言われた時に、どっちもどっちですけど、ただぼくが写真を撮る時の基本にしているのは、ルネッサンスとか、それよりも前のバロックの時代のタッチがベースなんですよ。どこまでいっても。

田中： うん。

和田： なんで、伝統なんです。伝統のタッチをベースにしてて、それはちょっとだけ違うふりかけをかけることによって、古臭くはならない。そんなふうに変える要素が、長くやっていけるのになって。ただ、根本は伝統。絶対的な美のパターン。比率。

田中： 黄金比とか、ありますもんね。

和田： 黄金比、白銀比、青銅比とか、まあ何種類かあるんですけど、そういう比率をはめる。

田中： それを踏襲しつつ、そこに新しいものを。

和田： はい。要素を入れて、古く見えないようにしたいなっていうのが、あるんですよ。だから、よく建築の写真なんかを見ると、あの電柱が邪魔だから、どかしたら撮るっていう人もいらっしゃるし、自分の絶対的な絵に現場を近づけるっていうパターンの人もあるし。

田中： うん。

和田： この現場の中で、絶対なところはここなんだけど、そうじゃなくて相対で見た時に、これをより昇華させる方法はないだろうかという方に、ぼくは愉しみがある。

田中： 制限の中で……。

和田： いかに「ハイパフォーマンスで」っていうところに。

田中： 面白い。

和田： そうですね。なかなかそれが上手くいかないから、ストレスも多いんですけど。今日もちっと家の形、この部分気に入らないなって。「こっち側にもうちょっとあればよかったのにな」とか。いろんな背景があって出来上がった家なので、一概には言えないんですけど。ただやっぱりこの形である以上、「ここにこれがあった方が家としてのバランスは絶対なのに、な

んでだろう」って疑問をまず感じつつ（笑）

田中： あはは。

和田： さあ！（笑）

田中： さあ、そこで（笑）

和田： 「そこで、ぼくは、なにを、どうするんだ」って。現場でふらふら見ながら、いろんな視点になっていくんですね。無数にあるんですね、その点が。撮影するポイントの。絶対的なポイントもやっぱりあるんですね。ここから撮ると外さないっていうのも。それも、サークルの半径が広くなればなるほど、ぼくの技量が上がったのかなって。

今までは、『ここしか撮れない』だったのが、ちょっと技術が上がると1メートルくらいの半径内に入れば、後は技術でカバー出来ちゃえるようになる。なってきたって感じですよ。

田中： そうかあ。

和田： これ、動かないものだからいいですよ。富士山とか。動かないものだから、ここにぼくがいれば、あれはそのまま。後は周りがどうなのか、意識が変わってく訳ですよ。人の場合はそうじゃなくて、髪のがさが、長い短い。色が白い黒い。これによって撮り方も違う、ライトの組み方も違う。それがその都度違う。そうすると、いらっしゃるお客さまが、昔は（髪が）短かった（笑）

田中： え？ 私？（笑）

和田： 来たら「長くなっとるやんけ」（笑）って。で、「あー」みたいなこともあるし、いつも整えていらっしゃる方が、ぼさぼさで来たりとか。「なんでっ？」っていう。

田中： アクシデント的に。

和田： あははは。そうすると、頭の中を切り替えちゃわないといけない。その時にリミッターが外れる感じですね。本気で考えないといけない。

田中： え？ そっかあ（笑） じゃあ、普段は予定調和的なものだ。

和田： リミッター内で処理が出来るんですね。で、多少の上げるっていうのは出来るんです

けど、いよいよ「ヤバいぞ」って時になった時は、GTRのサーキット状態で、リミッターが自動的に切れるようになってて。ヤバいと（笑）

田中： どっちが、いいの？ 自分としては。

和田： ん〜。ルーティンワーク的な、自分への負荷はリミッターがないやりとりの方が、その時の方がハイパフォーマンスの時もあるんで。そっちの方が、安定的だし、精神的にも辛くないですよ。

田中： うん。

和田： ただ、面白いか、面白くないかっていった時に、エキサイティングなのは、やっぱり、後者ですよ。

田中： ふふふふ。

和田： サーキットに飛び出て、リミッター外した時の方が、エキサイティングで、全然ぶっとんだ考え方を平気にしちゃってるんで。

田中： ですね。

和田： はい。「これ、こうやってやったら、こうなるんじゃないか？」みたいな。「よし！ やってみよう」みたいな（笑）

田中： 違う自分が出てきて。

和田： 違う自分が出てくる。で、「これをこうしたらこうなった。じゃあ、ここでこうすると、こうなるんじゃないか」とか。仮定と結論をずっとやり続けて、お客さまが置いとかれるんですけど、その間（笑）

田中： あははは。

和田： ま、それを話しながら、なんとか繋ぎつつ、自分が納得いく方向に、周りの環境を整えてくんですよ。

田中： うんうん。

和田： そんな時しゃべってることは、ちょっととんでる時もありますけどね。

田中： あはははは。

和田： ははははは。

田中： 内容が（笑）

和田： 適当なことしゃべってることもあるし、掘り下げてしゃべってるんだけど、考えてることは、もう別の事なんで。

田中： 口だけが勝手に動いてる。

和田： 口だけが勝手に。

田中： 頭の中では。

和田： 違う事を考え。

田中： 「おまえ、しゃべっとけ、おれ考えとく」……みたいな。

和田： あー。分かれちゃってる。ぼくは『スラムダンク』だと、仙道くんタイプかなって感じなんですよ。

田中： あー。うんうん。

和田： 100%じゃないわけじゃない（笑） だけど、敵が流川になれば（爆笑）

田中： 燃えちゃうぞ（笑）

和田： 200%で100%になってるし、敵が花道になれば（笑） 初期の花道だったら、50%なんだけど100%のパフォーマンスみたいな。うまいこと力加減を、具合によって凄く変えてるかもしれないなって。

田中： うーん。省エネっばい。

和田： そうですね。省エネですね。疲れないように、たぶん自分をしてるんで、そうやって。

田中： 車の運転も最初アクセル踏む時って、ガーッといくけど、50キロ位になるとアクセルに足載せてるだけで、一番燃費がいい状態とか。

和田： そうですね。たぶん、燃費が悪いんです、ぼく、すごい。

田中： そうなの？

和田： ターボ車だから、ぶん回す。回転数が上がらないといけないということは、エコ運転が出来ないタイプなんですね。本来は。

田中： ふふふ。

和田： で、うまく制限かけてエコ運転出来る、「ターボ車なんだけど、燃費10出るんだぜ、おれ」みたいなのを、良しとしていて。サーキットでワーストとなった瞬間に、バン！って踏めば、「300キロの世界によろこそ」っていうのも出来るんだけど。高排気量のエンジンなのかなって気がするんですけど、わかんないです。実はスターレットターボみたいに軽くて。

田中： ないないない（笑）

和田： ふふふふふ。速いぐらいな感じかもしれないし（笑）

田中： 面白いなあ。

和田： 車に喩えやすいですよ、そういう点では。どちらかという、自分の根本はブリティッシュだと思ってるんですよ。英国式で、結構堅い。

田中： あー。

和田： 英国式ってどんなんですかと聞かれたから、「3時になったら、ティータイム」（笑）

田中： あははは。

和田： めっちゃ、笑ってましたけど（笑）でも、ほんとそんな感じで。

田中： 伝統的で。

和田： 伝統的な。「これは、こうだ」ってもう理屈が決まってる部分は絶対外せなくて。でもただ、そうじゃない部分に関してはドイツ的なところもあるなと思ってます。車もどちらかというとポルシェの方が好きなんですよ。イタリア車よりも、フェラーリよりもポルシェ。なんですけど、最近人間ちょっと変わってきたなって思ったのが、ラテンに寄って来てる（笑）

田中： あははは。

和田： イタリア、スペインに寄って来てる気がしてて。昔はフェラーリ大好きだったんですけど、いつからか、ブリティッシュ、ドイツ、ゲルマン的な硬い感じの人間になりつつあって、なんか最近それが。

田中： ラテンに。

和田： ラテンに変わり。

田中： やわらかく。

和田： やわらかくなって来てるのかなって。

．．．．． つづく ^^

◆新撰組にみる鋭利感

田中： あの、こんな言い方するの、変かもしれないんですけど。尖ってる部分が、前の時はあった感じがしましたね。

和田： はい。そうですね。

田中： キンキンに。

和田： キンキンに。

田中： 今はそれがまるまったとかではなくって、そのキンキンに尖ってる刃にカバーが被ったみたいな。

和田： ああ、そうですね。

田中： まるくなったんじゃなくて、尖ったまま。

和田： オブラートかベールに。

田中： そうそうそう。

和田： ベールに包んだ、自分で。なんらかのことによって。ベールに包んだんだけど、リミッター外さなきゃいけない時は、外して、尖った自分が出てくる（笑）

田中： うん。そんな感じがしたんですよね、和田さんのは。最初撮っていただいた時は、その剛毅な、そういった部分が。

和田： キンキンだった。見た目はやわらかいのに、中身は。

田中： うん、とても厳しい。

和田： 鋭利な刃物的なやつですよ。

田中： ええ。それを感じてたんですけど、昨日本当に久しぶりにお会いして、やわらかい印象であったりとかは全然変わらないんですけど、尖ったものが、少し覆われてる感じがしたんですよ。「ああ、被せたんだ」みたいな（笑）

和田： あー、そうですね。むしろたぶん、昔よりも鋭くなってるかな、今の方が。

田中： そうそう。角度もね、大きい銚っぽいものだったのが、今だと、錐とか、アイスピック的な、細くてより深く刺さるものに、変えてらっしゃるんだらうなって。

和田： 変えてますね。そうですね。よく笑い話で、「バッサリ斬る時は、斬るよ」って言うようにしてて、その時に引き合いに出るのが、やっぱ「新撰組」なんですよ。どこまでいっても。

田中： 新撰組なんだ（笑）

和田： そう、新撰組。「悪即斬！」そのくらいの速さで「悪いものは悪い、いいのものはいい。斬る時は斬る」というのは、凄くわかりやすいじゃないですか。身近な存在で他に変わるものってないんで、日本で。

田中： うん。

和田： だから、「誠」の羽織、ほしいなーって（笑）

田中： 着ちゃうんだ（笑）

和田： 着ちゃったほうが、わかりやすいよね（笑）

田中： 新撰組、好き？

和田： 好きですよ。結構、好きですね。

田中： 誰が好きなの？

和田： ぼく「斉藤一（さいとうはじめ）」が好きなんです。

田中： 斉藤一！

和田： 謎が多すぎて、面白いじゃないですか。最後は警察官までなっちゃって、わけわかんない。彼と、もう一人ぐらいですよ、幹部クラスで残ってるのって。不思議ですよ、残された理由もよく分からないんですけど、数々の戦争も越え、最後までずっと生きるっていうのは、

彼が指導者たる側面も見せたりとか、警察学校の剣術の師範にいたりとか、そういうポジションが常に任されてて。ある種、重鎮というのか、何かあった時に、神頼み的な存在だったのかなとか。わからないですけど、もう修羅場の数が違うじゃないですか。

田中： うん。

和田： 彼に代わって、修羅場を知ってるなんて、いないと思うんですよね、この世に。日本人の中でも唯一の修羅場を知ってる人を生かしておかないと（笑）、何かバランスが崩れるんじゃないかと。そういう悪玉の親分としての、君臨だったのかなとか。

田中： へえ。

和田： その辺に魅力がありますよね。「土方（ひじかた）」とかも、大好きですけど、もちろん。

田中： その存在理由っていうものにも、惹かれる？

和田： 惹かれますね。圧倒的な強さももちろんありますよね、そこには。『るろうに剣心』じゃないですよ。あははは。

田中： ふふふ。わかりますよ。

和田： 実際の方の話で（笑）。精神性ですもんね。結局同じことで、自分を常に砥ぎ続けて。みなさん、短命ですけど。土方にせよ、最期は負けるわけですけど、たぶんもの凄い鋭利なんですよね。

田中： うん。

和田： 齊藤は触れた時に、いきなり刺してくるような怖さを、めちゃくちゃ持ってるのに、温厚な先生をやってるふりをしてるのが（笑）あははは。

田中： あははは。

和田： ははははは。

田中： そのいかさま的なところが？（笑）

和田： そう（笑） ベールで覆って、いかにもまるく見せてるんだけど、あの人、昔は……（笑）

田中： 好々爺だけど、実際はあって（笑）

和田： その共通してる要素がそこにあるから、そういうのを感じるかもしれないけど。ま、ポルシェなんかもそうですね。普通に走ってたらドイツ車だから日本車と変わらないし、もっときびきび走るくらいの気持ちよさなんですけど、いざ踏めば、爆発的なパワーを出してくるんで、その瞬間の、解放感は近いものを感じるんで。

田中： うん。

和田： 元々じゃじゃ馬なフェラーリなんかとは、違いますよね。

田中： こう、分かりやすいね。

和田： 分かりやすい。もう。風貌からして「おまえ、じゃじゃ馬だよ」って（笑）

田中： あはは。

和田： 「うるせいし」みたいな（笑）

田中： アピールしすぎだよって（笑）

和田： しすぎだよ（笑） 「もっとスマートにいこうぜ」っていうのが、ま、ポルシェには備わってて。そういう点でも、尖ったエンジンが入りつつも、フォルムはそれなりにまとまって、今の時代にも合ってる。ただポルシェらしい伝統は残ってる。

田中： 面白いね。

和田： そんな感じかなーって（笑）

田中： 昔っから、そうなんですか？

和田： 昔から？ 考え方ですか？ 考え方はさっきの通り、尖ってましたよね、もっともっと、昔は。もっと古くから、ずーっと尖ってますから。親の影響もあるでしょうし。親も厳しかったですからね。両方とも、父も母も、はい。

..... つづく ^^

◆土木、プログラマー、士業での下積みがカメラマンにシンクロしている

田中： そうかあ。なんか前、違うご職業だったんですよね。

和田： はい。土木ですね。

田中： ええ？ みたいなの。

和田： そう。ものすごい転職だと思います。

田中： 切り替わったきっかけってあるんですか？

和田： 切り替わったきっかけは……。名古屋高速の江川線のところとか、談合やって摘発された時がキッカケですね。ぼくの会社も公共の仕事が主な会社だったんですよね。あれで業界全体が、冷えたんですね。

田中： うん。

和田： 見直さなきゃいけない。監査が入るとか。そんなのがあって、仕事が止まった時に「あ、危うい業界だな」というのと、いろいろ客観的に見ていくと、名古屋市ってものすごく完成された町で、これから新しく道を造るとか、どんどん少なくなっていく。直すことはあっても、造ることはない。保全という仕事はあっても、新規開拓、開発ってという言葉はない。

そうすると、名古屋で仕事をする以上、この仕事の先はない可能性が高い。当時は28歳でしたし、そもそもぼく入社時から独立したいって言ってたので。

田中： へ？

和田： やなヤツだったんで（笑）「資格を取るなら取って、独立したいです」って、野心を剥き出しにして入ってて。2002年だったかな、XPくらいの頃に。まだフロッピーディスク、ワープロですね。開くのになんで1分もかかるんだっていう（笑）

それが会社に入って、かたや1階は、ワープロ。2階はサーバーが入ってるPCが20台もある会社なんですよ。わけが分からなくて、ぼくその前コンピュータ関連会社にいたので、ネットワークも自信があるし、いろんなことも出来る、プログラムも書けるんで、「これはまずいな」と思って、社長に直談判して「3か月で替えさせてくれ」って。

田中： うん。

和田： ワープロ、パソコンっていった時に、これはもう時代遅れだと（笑） そもそも2002年の時点でまだワープロ使って、フロッピーっていうのはおかしいから、「それをネットワークに繋がれたPCに全部移行させる時間をくれ」って言って、システムを全部変えたんです。

社内のルール付けをして、「書類はここにいれよう」、「ファイルを読み出すと、こうなる」とか全部のルールを作って移行させた実績もある。それを運用して3~4年やってました。気質でしょうけど、おかしいものはおかしい、変えた方がいいというのは新撰組のそれと一緒にですね。

ある箱の中にデータを入れておいて、みんなが見にくい.....つまり、クラウドの考え方ですけど、2005~6年位には、クラウドの考え方で世の中もシフトしていったんですよね。

田中： 当時は新しいですよ。

和田： まあ、割に新しいですよ。小さい会社にそういうものを導入して行って、プログラムを作って、もう無駄な時間をとにかく減らす。プログラムする時間、大変でしたけど（笑） 後々考えると、1日かかりで作ってた書類が20分で出来るようになったりとか、2~3週間かかってた仕事が3秒で終わったりとか。

そんなことが出来た背景があるんで、変えて行くこともやれるし、何で食ってこうかなと、棚卸しをしたんです。その時に資格がそれほど揃ってないのね、独立して土木の業界でやっていけるほど。先細りの業界って考えた時に、難しいなって。高卒で飲食店に勤めて4年の間に調理師の免許も持ってた。実地でもやってたんで、料理も作れるんですね。なのでカフェもいけるとか。

資金もそれなりにあった。どうしようって。でも、カメラも好きだ。考えてみれば、カメラは資格もないし、行けるかなあって。飲食店はちょっと太公望的だなって。魚釣りでもして魚食べさせて、ぐらいになれば。でも、もうちょっと後だろうと思って。 で、カメラに本腰入れようって。持ってるお金、ほぼ投資して。

田中： カメラはお好きだったんですか？

和田： カメラは、元々趣味でやってたんで。

田中： どれくらいから？

和田： 22、3の頃からで、もう10年位はやってるんですよね。前の会社にいる頃から、仕事として請けることもありました。「有給とってでも、やってくれ」というのが増えてきたこともあって、「面倒みてもらえますか？（笑）」的に話をして、独立することになったんですよね。

土木の会社は、行政書士も兼務してる会社だったんで、ぼく、書類を書くこととか、法律も勉強してたから、幅広く知ってるわけです。なんで、開業時に助成金を使いました。役所に行って、「ぼくに受給資格があるのか？」って聞いて、書類一式くれと。まとめ方とか全部やれるじゃないですか。で、全部まとめて提出して。NOと言わせるわけがないですよね。

田中： ノウハウはもうあるし（笑）

和田： ノウハウはもう蓄積されてるし。名古屋市での公共の仕事で、それなりの点数を取れるだけの技術者だったんで。ミスが少ない人だったんですね。

書類上の審査だったら、元々実務者なので、下手すると有資格者よりも、知識も技術力もあるんで、負けなだらって持って行ったら、通って.....みたいな。前職、いわゆる「士業」なんで、弁護士から何から全部友達にいるし、困れば、コンコンって（笑）

田中： この場合、どうすればいいのって（笑）

和田： 知識も、実務でやってきた知恵も活かしつつ、やってるんでね。今はカメラマンですけど、複合的にいろいろ裏には下積みがあるんで。うまくシンクロしながら仕事してる感じ。

田中： 面白いね。違うルートからの。

和田： そうですね。カメラマンってのは、面白いです。

田中： カメラマンをしていく上での、ルートって、割に。

和田： 直線的ですよ。高速道路的ですよ。もう、乗らないと。

田中： やってく上での、足場から固めたって感じかな。

和田： そうですね。足場は固まっているんで、その上で何を選んでも、ある程度は出来る。それなりにビジネスは成立するであろう土台はもうある。それが1年目の時に、士業の先生から、「

危うい」って言われたんです、実は。

田中： 危うい？

和田： そう、「マルチすぎて、何をやってもそつなくこなせるっていうのは、尖った部分が少なすぎて魅力がないことになるから、砥ぐ必要がある」って。

ぼく、その先生の言葉を大切にしていって、半年に1回しか会わないんですけど、その先生に何を言ってもらえるのか、楽しみで会いに行くみたいな（笑）最近砥いできて、「どういうふうに言ってもらえるのかなって。ほんとぐずぐずの頃から今までを見守ってくれてる方なんで、ありがたい存在ですね。

田中： 半年に1回みてもらう（笑）

和田： 通知表ですよ（笑）ほんとに。

田中： とりあえず宿題やってって。

..... つづく ^^

◆儒教、道教など精神的な学問も学び複数の柱を建てて行く

和田： 卒論的感覚ですね。先生は、「これやれ」とは言わないから。なんか自由研究みたいに。もちろん精神的な学問も重要だと思ってるんで、儒教とか幅広く。その中でも儒教は最初の頃、かなり勉強しましたね。

田中： それはどうやって勉強したんですか？

和田： 本が多かったですね。説法して下さる方がいたので、毎月かな、通って勉強させていただいたり。最近は道教っぽい。

田中： 少し変わってらした。

和田： そうですね。なんかそんな感じ。規律を守ろうとか。

田中： ドイツっぽいね（笑）

和田： ドイツっぽいですね。儒教的概念を最初に入れてもらえたんで。今も活かされてるし。よく出される儒教の孔子と道教の老師の話は笑えて。若い頃に孔子と老師が会うんですね、瀧のところで。その時、孔子は「こうした方が世の中がよくなると思うんだ」って話すわけです。そしたら老師は「青いな」っていうようなことを言うわけです。

田中： 笑

和田： 達観し過ぎてて龍のような存在だって、孔子は言うわけですよ、老師の事を。論語で、「十五にして学を志し、六十かな、耳従う」って書いてあるんですけど。耳っていうのが老師の本名なんですって。耳従うっていうのは老師の事じゃないかっていう説もあって。ようやく60歳になって、若い頃噛みついた、とりとめのない龍のお爺は、そういう事が言いたかったんだって（笑）それが60歳になって分かってきたなって説で。違う説もありますけど、ぼく、これ個人的に好きで。

ようやくその頃に、自然崇拜、すべて神だみたいなのが、分かるようになったっていう人間を感じる孔子の部分が。ふふって笑える感じが好きだったりしますよね。そういうのも背景にあるんで、幅広く、精神的な部分から経営の事まで。

田中： 柱をいっぱい造ってる感じですね。

和田：　そうですね。一枚板で上にボンツとのせても安定はしますよね、やっぱり。1本だけだったら、ぐらんぐらんしますもんね。今後の事いろいろ考えてますけど、今は自分のことはちょっと置いて、周りにいる協力してくれる人たちのしあわせを願おうという感じで。

自分の仕事は、もう固定のお客さんがいるし、あんまりそこにガツガツするのではなく、拡げるということも含めて、何でもかんでもぼくがやらなくてはという考え方は置いて、一緒にやるべきものはやる、任せられると思うものは任せる。会社として請けてる以上、すべてはぼくの責任になるんだけど、そういうふうになっていかなくちゃ、いかんかなあって、ぼんやり考えてて、それを少しずつ実践してる場所。

田中：　うーん。次のステージって感じですね。

和田：　そうですね。今までは have to で、「おれが、おれが」って尖り続けてたんですけど、ほんとにオブラートに包んで、そのベールをいかにまるく見せつつ（笑）

田中：　やっぱりまるく見せることは、時には必要だったりします？

和田：　と思いますね。結局、何が良さかはわかりませんが、まるく見せなきゃいけない時もあるでしょうし。相手が尖りっぱなしの人なら、いいんです。ガンガンやりあえば。

田中：　そういう人たちには、逆にそのベールが邪魔で。

和田：　そう。最初から取り払って、一刀だけ差して「さあ、チャンバラでもやるか」って（笑）

田中：　おまけに真剣（笑）

和田：　そう、真剣でお互いガンガンやったほうが、お互いに気持ちいいですよ。もう「防御する気もないだろう、おまえ」みたいな（笑）　そういった感じで行った方が、鋭いので、お互いに面白いじゃないですか。

田中：　うん。面白い、面白い。

和田：　そっちの人には、それが適してるし。「無防備だよお」って、戦場に無防備でやってくる人いますけど、「君たち、平和はね」ってスタイルで来てもらった方がいいなって子たちも最近多いので。若い子なんか、ほんと多いけど、そういう子たちには、そうで行かないと。

田中： うん。

和田： そんな子たちの前に、新撰組の羽織着て来られても、「や～、殺されるんじゃないか」
みたいな（笑）もう話を聞く以前に、ぼくの服を変えないことには、見方も変わらんとい
う（笑）そんな感じですよ。

田中： 確かにねえ。

．．．．． つづく ^^

◆日本人が持つビジュアル重視感

和田： ビジュアルの仕事をしている以上、ビジュアルも大事だと思うし、日本人って直感力も優れてると思うんですけど、凄く見た目を重視する民族で、「侘び寂びだ。自然に咲く野花が美しい」とか。

田中： それって、見た目と関係あり？

和田： それは見えるものに対して、美しいとか、美しくないとか、常に考える、見てるわけですよ。根本の部分じゃなくて。アメリカ人なんて潔いですよ。禿げてても、隣にすごい美人の人がいたりするわけなんですけど、日本人でそういうのあんまりありえないですよ。

田中： そうか。

和田： ロビン・ウィリアムの横に、ニコール・キッドマンがいても、ゆるされる。

田中： 違和感はないですよ。

和田： というのは、「外国は見た目どうあれ」、というところがある気がする。

田中： そういう視点で考えたことなかったな。

和田： 日本はそういうの、ない気がしてて、「日本はビジュアルを大切にしてお国柄なんだな」って、ぼく思うんですね。美しさをいろんな形で、表現したりとか。iPhoneがあればほど売れるのも、合理的な何かがあったりするわけなんですけど、国民の割合で言うと、見た目がいいとか、カッコいいとかで持ってる人の方が多いというのは、それが背景にあると思う。

田中： 確かに日本だけですよ。色にしてもあんなに種類があるのも。ねずみ色でも赤色でも。

和田： もの凄くたくさんあって。

田中： 江戸時代、「質素に」って言われたから、着物の裏を派手にしたりとか。

和田： それが、粋になって行ったりとか。塩沢みたいに、どこ見ても麻っぽいののに、実は全部『正絹（しょうけん）』みたいになって。「やるなあ」って（笑）「新潟でこういったもん作ってたんだー」って。技術力があるがゆえに出来ちゃう民族なんですよ。

田中： うん。

和田： ビジュアルは質素なんですよ。でも中身は凄まじいって言う。「お上がうるさいから、言う通りやっというてやるぜ」みたいな（笑）

田中： 「ただし、表はな」（笑）

和田： あはははは。見た目はって言うのは、日本人のクリエイティブな元々の良さで（笑）
ぼく、凄いなって思ったのは、鎖国時代、日本に来た外国人の見聞録があるんですよ。

田中： 勧めて下さった本ですよ。

和田： そうそう。『逝きし世の面影』という本。あれ読んでると、分かってるんですよ。「質素に見えるんだけど、全部正絹だぜ。なんなんだ、この民族。みんな絹着てる。」

田中： うん、高級品。

和田： うん。高級すぎて一部の人しか着れないもののはずが、女子供まで着てる。こんなしあわせな民族はいないなって。というのが、あの本の言わんとするところじゃないかなって。その当時の日本の美意識であり、物質面でもあり、最高峰だったんだらうなって。世界見ても、ここしかないか『ジパング 黄金の国』だった。

田中： うん。

和田： それが今いろいろと低くなってる。教育なんかも考えると、「よくアメリカは、ここまで日本を下げられたな」って思います。アメリカの研究にも拍手を送りたいですね。

田中： 下げられた？

和田： 国力を下げられたと思うんですよ。そもそも日本は裕福。物価的には低いんですが、持っているものはものすごくハイレベルだったんです。だけど、よそを知らないからそれが普通だと思っててね。自国のものしか使わないから、国力を下げたり、文化レベルを下げないことには、外国のものが売れない。そういう意味で、いろんな教育をしてどんどん下げてったと思うんです、どんどん国力を。それを早い段階で見抜いて下げていったアメリカって凄いなって。

田中： 敵ながら。

和田： 分析する側なんで……。ぼくが同じ分析する人間として考えると拍手ですね。高めることも出来るんでね、彼らは。分析できてる以上は。

むしろ自分たちよりキャパがずっと上だっていう事を当然見抜いているからこそ、「制限をかけないと、私たちには把握しきれない」って考えてるところもあるわけですよ。そうすると、「コントロール出来る支配下に置いておかないと、怖い存在」って考えもないわけじゃない。

田中： それが根底にあると思います。

和田： そうですね。

田中： 戦後教育も、言葉は悪いけど低能化を……。

和田： そうですね。それを凶った。で、実際にそれが出来た。凄いですよ。そこまで制限できた。順応しやすい国民性というのも背景にあるんですけど。

田中： 私、日本人のキャパって大きい気がしています。今お話されたように、能力を下げることをさせられるんだけど、根底に高いものを持っているから、外国から見た時に、「日本人って得体が知れないという存在なんだろうな」って。だからアメリカの分析力やそれをしたってことも凄いんだけど、それを上回る資質も、日本人は持っているんじゃないかなって。

和田： そうですね。ようやく出始めてる気がしますけどね。ぼつぼつと。日本国内に閉じこもる以上、またその手のプログラムはすべてにおいて構築されてる以上、そこからは出にくいですよ。となると、国外に出ることによってリミッターが外れる可能性があるわけですよ。

それは自分にも置き換えられることで。国外に行ったら、より研ぎ澄ますやり方が通用しやすくなる。それだったら、国外で、それもありがたくなって。

．．．．． つづく ^^

◆どこに愛はあるのか？

和田： 逆算して話しをすると、奥さんが、ぼくと結婚した理由は、それが大前提で。世界にいても、仕事ができる人と結婚する。なんとかする人と結婚して。それが根底にあったから、不安定な収入とかは、それで目をつぶった。

田中： 生命力の強さみたいな。生き延びる力みたいな。

和田： そうですね、そこにフォーカスしたから、現状の動向は意識にない。

田中： それ大事ですよ。

和田： 奥さんが言わんとすることが、だんだん実現化してるんで。それは先見なのかなとも思うし、ぼくもそれに操られてるのかもしれないし（笑） 奥さんも言ってますよ。「私が乗せられてるんじゃないの？」って。「いや、ぼくが乗せられてるよ」って（笑）

田中： どっちが乗せられてんのかな（笑）

和田： なんか、そんなのやりあってる感じがしますよね。

田中： 楽しいね。

和田： それぐらいのバランス感覚を持ってる人と結婚できたのは良かったなって。ベースラインはほぼ一緒で。家庭環境は違えど、たぶん精神的な部分とか意識する部分とかかなり近いんで、言葉が少なくても生きていける。外国人みたいな感覚ですね。相手は英語、ぼくは日本語、お互い言葉は分からないけど、なんとなく。そういうので、変なストレスはなく。

田中： その暗黙知の部分のすり合わせが出来てないと、ストレス溜まるんですよ。

和田： ほんと大変っすよね。恋愛じゃなくて、愛情だったから、よかったですね。恋だの、愛だの言ってる人と結婚したら、たぶんいざこざ多かったと思いますけど。「愛してるって言わなきゃいけないの？」みたいな（笑） あらためて確認するようなことじゃないんじゃないって。そういうの、ある方にも言われましたけど、「そういう笑顔は親からの愛情が存分ないと、出来ない笑顔だよ」って。同じように奥さんにも言えるなって。長男長女なんで。

田中： 一番最初の子はね。

和田： 下の子からすれば、3倍から4倍の愛情を受けるっていいですから。時間の割合からいっても当然ですよ。そうった背景からしても愛情はたくさんもらってますから、いただいた分は他に。

田中： コップの容量は。

和田： 圧倒的に多いですからね。与えられた分、与えることも出来るわけですから。そんな話をしてたんですよ、愛について。いろんな愛ってあるじゃないですか。好きとか嫌いとかってというのは男と女の愛で儂いものじゃないですか。友達だって、愛っていったら愛ですよ。写真を撮る相手をお愛せないのに、いい写真になるわけがない。「お金に見えてます、諭吉です」とか（笑）

田中： あはは。

和田： 「それって、どうなんだ？」と（笑） そうじゃなくて、愛せた分だけいい結果が出て、その対価が払われてるわけで、愛の結果だとぼくは思うんですよ。

「どこに愛があるか」って、凄く大切に。どんな相手でも愛を持って接しないと分かり合えもしないし。さっきの家の話に戻ると、この家のここが足りない。だけど「愛せないか？」って言われたら、「愛せます！」みたいな（笑）

田中： あれば、もっと愛せるけど。

和田： そう！「なくても愛せるよね。じゃあ、その愛を、どう表現するか」という感じの流れです。それをある理屈でもって、表現するわけですよ。最後のエッセンスが、最後の愛情のスパイスなんじゃないかなって。

田中： きれいじゃないですか（笑）

和田： あはははは。

田中： 作品は、愛なんですね。

和田： そうですよ。芸能人の離婚騒動とか出て、「和田さん、ライブがあるので、今度パラッチして下さい」とかね。そういうの、時々はかかって来ますけど、あんまりないですね。それよりは、「ワンちゃん、ねこちゃんとオーナーさんを一緒に撮ってもらえませんか」とか。

田中： いいですね。素晴らしい。

和田： そういう正のお金をいただいている。負の金は頂いていない気がするんで、それを大切に使うのが、ぼくの役目で。

田中： こう、とてもクリアな感じで。

和田： 本来のお金の流れ……。マクドナルドに行きました。「ありがとうございます」をレジに向かって言われても（笑）「お客はぼくですけど」……ってね。「そこには愛もなんもないだろう」って。

お客さまをお金だと思ってるから、レジに向かって頭を下げるわけだし。やっぱり目の前の人に、本気で「ありがとう、また会いたいです」ってくらいの気持ちで、「ありがとうございます」って言えることは、仕事の醍醐味じゃないかって。

田中： パパラッチやって、「また会いたいです」っていうやつ、いないですよ。

和田： ないですね。逆にぼくが刺されちゃう（笑） ジャーナリストとか、戦場カメラマンとかいますけど、そういうところは、ある人は喜んでくれるけど、ある人は喜ばないという側面も、そこには存在してるんで、その人たちの精神力も凄いなって。

田中： そういったものを持ちながら、向かってるわけですね

和田： 向かってる。そうなんです。家庭というものがあって、それを維持し続けるためには、戦場で商用のカメラマンになるしかなかった。で、メディアにでないと、やっていけないのがわかった。じゃあ、演じることに徹して、そこで貯めた資金でもって戦場に行って写真を撮る。その資金で家族は生活する。これも商売のスタンスですね。凄く尊敬できますよね。

戦場で撮ってる写真がむごいとか、いろいろ心に刺さるような映像などもいっぱいあるんですけど、そんなのがやれるかって言われたら、果たして……ってなるだろうし。

田中： 焦点の向くところが、ひとそれぞれに違う気がしますよね。さっき和田さんもおっしゃってたけど、愛情をいっぱい与えられて……といったそういう焦点で。与えていただいた、あたたかい、やわらかいもの。だから、そういう少しきついものに焦点が向く。あるという事は、ひょっとしたらそれをする事で、今まで得ることの出来なかったものを対価として得てるという感じかな。

和田： はい。ありますよね。タイミングとか順番の違いで。

田中： その年になって自分で作り出すことが出来たから、それに向かっている。

和田： はい。

田中： それをみると、それぞれに動く場所ってあるんだろうなって思いますね。それがふさわしい場所、それを作って行くことが、凄く大事な気がします。

和田： 盲目だと、スポットライトがステージのどこにあるのか、わからない。

田中： うん。

和田： あなたの立ち位置はココなんですって、その位置に立てば、スポットライトに当たるのに、外れたところに立っているわけですよね。見えないから、その場所に立てない。だから、それを導いてくれる人は、いろんな方がいらっしゃると思うけど、その方に導かれてそこに立つもよし、立てない人も、それはそれでよしと思いますね。

そんな背景がありつつ、外れていても写真を撮る以上、ぼくの場合は存在がないと、「何を撮ってんの？」って話になるんでね。その人にどうスポットを当てるかっていうのが、ぼくの仕事かなって……とも思う訳ですよ。

田中： うん。

和田： 結婚式場によっては、新郎新婦に照明がない、同じ光の中に立っている場合もあるわけですよ。そうすると、だれが主役なのかが、この画から伝わってこない。それはいかがなものかになるわけです、ぼくの中では。

主役は決まっているわけだから、お店が出来てないんだったら、ぼくがやるしかない。照明やフラッシュを使って、光がそこに行くようにとか、なんらかの方法使って、そのふたりに脚光を浴びせる必要があるわけですよ。

それはステージ上でも一緒に、外れてるんだったら、ぼくがスポットライトを当てるしかない。その中でいい一瞬があって、その人がそれで輝いてるとというのが評価されていくんだったら、それはやっぱり愛情なのかなって思いますね。

田中： ですね。

和田： 「真っ暗だから、しょうがないじゃない」って、そのままにするのではなくて、「ぼくに何ができるんだろう？」ってところに、魂を燃やす。頭を使うのは、そこは重要な気がしますね。

田中： 愛なんですね。

和田： 愛なんです。

-

田中： ですね。ありがとうございました！

こちら、好奇心でかきだした質問表です^^

和田さんにもインタビュー後、おつきあいいただきました。

まずはどうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

<いろいろ質問表>

- ・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
- ・好きな本を一冊選んでください
- ・いつも必ずする「習慣」はありますか
- ・ねこ派ですか？いぬ派ですか
- ・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
- ・それのどの部分が大変だと感じたのでしょうか
- ・それをどうやって乗り越えたんですか
- ・その時、大切にしていたことは何ですか
- ・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
- ・その人は、何か言っていますか
- ・3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
- ・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
- ・人として、これは譲れないっしょ??っていうのがあったら、何ですか
- ・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
- ・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
- ・それはどんな冒険になるのでしょうか
- ・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思えますか
- ・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
- ・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
- ・どんな時にイラッとしますか
- ・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
- ・何をしている時が一番たのしいと感じますか
- ・今一番欲しいものは何ですか
- ・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
- ・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい
- ・そこで何に気付きましたか
- ・今の自分を突き動かしているものは、何だと思えますか
- ・今死んでも悔いはありませんか
- ・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

- ・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
- ・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
- ・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
- ・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
- ・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
- ・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
- ・自分のキャラを一言でいうなら
- ・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
- ・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
- ・一年後、どんな自分にいるでしょうか
- ・最後に何か一言お願いします ^^

..... つづ

きは和田さんのおこたえデス ^^

和田： あ、茂木さん、蝶々好きらしいですよ。

田中： そうなんですか？

和田： ツイッターとかで、「ジョギング中、〇〇蝶、発見」とか。

田中： この間、テレビに茂木さんが出て、「この頭は、パーマじゃなくて、天然なんです」って言ってましたよ。

和田： あはははは。それ、面白いですね。

田中： もうちょっといいですか？

和田： はい。

田中： 月並みですが、小さい頃はどんなお子さんでしたか。

和田： 小さい頃は、好奇心旺盛だったと思いますね。今の自分の子も一緒ですけど、とにかくなんかやりたかったですし、結構ひとりで遊ぶのも好きだった。紙飛行機で、長距離飛ぶ飛行機と、短距離でアクロバティックな飛行機とか。この形にすると、先を折るとこうなるとか。小さい頃から分析してるわ（笑）幼稚園の頃からそうだったかな。

田中： なんか理科とか好きそう。

和田： そうですね。「理（ことわり）」は好きですね。

田中： 好きな本を一冊選んでください

和田： やっぱり、『逝きし世の面影』、あれいいですね。

田中： 勧めていただいて、私も読ませていただきました。
いつも必ずする「習慣」はありますか。

和田： いつもする習慣。家族愛的な話だと、ハグやキスは欠かさないみたいなのはありますね。
。そういうスキンシップが図れないようになると、危うい気がする。べたべたって感じじゃなくて、もっとラテンな感じだね。

田中： それでラテンが入ってきたのかな？

和田： そうかもしれませんね。

田中： 被せてるベールに役に立つ感じですね。
猫派ですか？ 犬派ですか？

和田： 犬派ですね。ぼくは。田中さんが猫を飼っていらっしゃるので失礼ですが（笑）『忠犬ハチ公』とか、小学生の時、泣いたもん。

田中： 私、犬の健気さが痛くて……。

和田： それで、猫？

田中： ええ。

和田： あー。健気さがありますね。

田中： 「私が死んで、なんであなたも死ぬの」……みたいな。自分がいなくなってもそのまま生きてって欲しい。凄く気になって地縛霊になりそう。それは犬猫に限らず、家族に対してもそう。自分が先に逝ったら、再婚して、臓器提供してって言うてるんだけど、夫は「やだ」って。

和田： ぼくも、凄くドライですね、そういう点では。奥さんが子供に対して、わーって怒ったりする時に、「あなたがイライラする気持ちも分かるけど、今日これで翌朝起きてこない子供だって世の中、ごまんといるんだから。そういうこと考えると、もう少し冷静になれるよね。だからぼくはあなたに対しても同じこと考えてるから、些細なことで怒ったりしない」って。

田中： うん。でもさ、やっぱり、腹が立つ時あるんですよね。

和田： それはもちろん。

田中： けどお、その日のうちに仲直りしとくってというのは決めてるかな。

和田： 繰り越しちゃうと、危ないんだよね。ほんと、何があるか分かんないから。

田中： うんうん。私もそれは思う。「行ってらっしゃい」って言った瞬間に、「次に生きて会えるか分かんない」っていうのが、いつもある気がしてて。

和田： そうですね。ありますね。

田中： さっきのお話で、気持ちの鎮静化も出来るんだけど、まあ、後に後悔したくないっていう。

和田： 後悔しない生き方も、根本は底にある気がしますね。

田中： そうそう。後ろ髪をずっと引かれたまんま行くよりは、そういった要素は出来るだけ少ない方がいいので。だから出かける前準備とかで、わーってイラつくことがあったとしても、行くときは、ハグして「行ってらっしゃい」みたいな。

今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか。

和田： 前の離婚かな？

田中： 前の離婚？

和田： ぼく、2回目なんで。

田中： あら、そうなんですか？

和田： はい。前の離婚は大変でした。別れてくれなくて。

田中： あー、その時は『恋愛』だったんですね。

和田： ですね。そういうことだったと思います。恋愛婚の危うさは、その時よく知れたんで。相手には感謝してますよ。いろいろなことに関して。

田中： そうですね。データも取れたし。

和田： そう、十二分に。データですね。

田中： ええと、それのどの部分が大変だと感じたのでしょうか？ 聞いちゃっても、だいじょうぶですか？

和田： ええ。1年近く別れてくれなかったから、やりようがなかったし、その先にステップが踏めない、ぼく自身も。とりあえず別れてから……という事実が欲しかったのに。別れてくれるという期待があったのに、それがずーっと邪魔するわけですよ。仕事にも、私生活にも、表情も暗いとか、何かに焦ってるとか、全部に波及するから。さっきの話、リミッター解除した状態で仕事し続けられるようなハードな仕事だったらいいんですよ。

田中： うん。

和田： その瞬間は意識しないから。そうなんですけど、ゆるいと意識下に入っちゃう。そうになると、もの凄くしんどくて。

田中： それをどうやって乗り越えたんですか。

和田： 親の愛情がやっぱり大きいのかなって思いますね。

田中： 親の愛情？

和田： 実家に戻った時でも、何も言わずに、「自分のペースでいればいいよ」って感じにしてくれてたんで。何も言わないってことが、親の愛情だと思いますね。「あーしろ、こーしろ」って言われなくても、やれるってことは、分かってるし。

田中： それは大きいですね。

和田： 大きいですね。何も言わなかった親の愛情が大きい。

田中： 言葉に出来ない時ってありますしね。

和田： あります。必要ない。

田中： その時、大切にしていたことは何ですか。

和田： その時、何を大切に……。カメラでしたね。

田中： カメラ。

和田： そう。その時、友達はそれしかないから。携帯も折られたりとかして。

田中： え??

和田： 連絡先も何もない。まあ、当時は、頭に中に番号が入ってる時代でしたけど。10人や20人ぐらいは全部番号が頭に入ってるんです。

田中： 素晴らしい。

和田： 指の流れとかで、覚えてるんですけど。

田中： え、じゃあ、ATMとかで数字並び換えられるのがありますけど、それは？

和田： ああいうのになると、ダメですね。あはははは。

田中： すみません。好奇心で。

和田： その頃は、自然ばっか、撮ってましたね。

..... つづく ^^

田中： 3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか。

和田： 3つ……？ とりあえず、1番は、健康であること。家族円満。あと何だろうな。あとはスタッフに恵まれることかな。ひいては最終的には仕事が安泰になる事なんで、この3つがないと、絶対仕事は大成しない。

田中： さっきの、秋本さんですね。

和田： はい。

田中： 今、2階建ての建物を建ててる感じですね。

和田： ははは。

田中： ベースがあって、事務所があって、高層になっていくんだらうなって。次のステージに。

人と会う時、つきあう時、その人のどんなところを観ていますか。

和田： どんなところ……。仕事柄、全身見ちゃいますけど。でもやっぱり、目かな。その人の目を見るな。

田中： 目を見て、何を観るんですか？

和田： 全部分かっちゃう気がしますね。「なんか疲れてるな、曇ってるな」とか。数年ぶりに会って、「老いたなー」って（笑） 疲れてるように見えて、老いなのかもしれないけど。でも、その目が物語ってる気がします。

田中： うん。

和田： 「まだ目が生きてるね」とか、言っちゃうから。「いろいろあったみたいだけど、目が生きてるから大丈夫だね」とか。

田中： 確かに、覇気のない目ってありますから。

和田： ありますね。「目は口ほどにものを言う」ってありますから。ぼくらが気をつけなきゃいけないのは、目の中にある白い点です。この白い点を『キャッチ・アイ』っていうんですけど、その人を活かす写真は、そのキャッチ・アイがないと、それこそ死んだ魚の目になっちゃうん

です。その使い方を誤らないように、しないといけないなあって。

田中： 白い点。

和田： これがあるのとないのとでは……。死んだ目か、そうじゃないか……。

田中： 『青いターバンの少女』の解説をテレビで観たんですけど、その目の白い点の入れ方が、通常の光の入り方と違うところに入れてあるって。

和田： あー、深いね。

田中： それは、その人が一番表情として生き生きとして見えるところに。

和田： 効果的な位置に入れてる。

田中： そうそうそう。そんな解説をされてて、「凄い」って。

和田： 一番凄いのは、彼らの絵画っていうのは瞬間に描けるものじゃないんですよ、写真じゃないから。

田中： うんうん。

和田： 何分かけてスケッチして、それがああいうふうになって行くのかわからないですけど、「影に偽りなし」なの。本当にうまい名画っていうのは、影に偽りが無い。

その影がなんでそこでマーキングできたんだっていうのは、まだわかんない。ズレて行くはずなの、絶対、影って（笑）刻一刻と影が過ぎていくのに、すべてバランスよく収まっているのを見ると、「深いなあ」って思う。弟子が描いた絵画で、下が大理石だったりすると、入ってきた光が反射して、いろんな方向に散らばるんですね。

田中： うん。

和田： そういうのをちゃんと描いてて。それを観ると、その弟子が何を習いたかったのかがわかる。「光線と影か」とか、すぐわかる。それを観て「憎いなー、こいつ」ってひとりで笑ってる、美術館で（笑）

田中： あー、わかる。宮崎駿さんのアニメで「母をたずねて三千里」ってあるんだけど、オー

プニングで、マルコが旅に出てるんだけど、雲が流れてくんですよ。その雲の影も一緒に動いていく。私ヲタクだったんで（笑）

和田： あはははは

田中： それを仲間と「凄いよね！雲の影も動いてんだよ！」とか語り合ってたんですけど。先日、そういう話を違う人に話したら、「そんなとこ見てんだ、マニアは（笑）」って言われて。

和田： そうだよな。やっぱり、写真やる以上、その人のライトはどこに影を作るのが重要。写真って、「撮影」と書くように、「影を撮る」んです、ほんとは。光じゃないんですよ。

田中： あー。

和田： だから影をどの部分に入れるのかっていうのが一番重要なことであって。影がないのは写真じゃないです、本来は。今でこそ、カラーで、色で表現するようになりましたが、昔は明部と暗部しかないんで、影でしか語れなかった。

田中： 面白い。

和田： 面白いですよ。

田中： 『モナリザ』も構成的にああいう顔になるはずがないっていうのを、聞いたことがあって。

和田： 顔の向きとかバランバラなのに、あんだけ自然に見えてしまう。

田中： そうそう。そこら辺が絶妙なんですよな。

和田： 絶妙ですね。それが天才と言われる所以です。影が全部バラバラで描かれてるのも名画になってるのもありますし。

田中： 裏に何があるのか、それによって見えてくるものが全然違う。

和田： 全然違う。ぼくこの間、ナポレオンの原画を見てきたんですよ。凄かったんですけどね。もの凄くでかいんですよ、5mくらいあるのかな、ドーンって。ナポレオンの馬に乗ってるやつ。フェラーリみたいなね（笑）

田中： あはは。フェラーリい？

和田： ははは。あれでね、一番びっくりしたのが、「キャッチ・アイ」がない。衝撃を受けてさ。それは、その画家が、「こいつ、短命だぞ」と、踏んだんじゃないかって。

田中： え？ 短命だから？

和田： 死んだ魚の目にしてるってことなんですよ。キャッチ・アイがないってことは。

田中： うーん。それを見抜いて。

和田： だから一番のシーンのように頭に中に植えつけられてるぼくとしては、「ええっ??」ってなって、「なんでっ？」って（笑）

田中： あははは。

和田： 白馬なんだから、「そもそも、はね返ってくるだろう？」みたいなさ。

田中： それがつけてない？ 作ってない？

和田： 作ってないんですよ。だから目が沈んでる。ハットがね、深いからといったって、白馬がここにいる以上、はね返るはずなんです。入れなかったのには、それなりの理由があると、踏んでます。

田中： 意図なんですか。

和田： 意図なんです。

田中： それは主張なんですか。

和田： きっと主張なんだと思います、そこは。例えば、孫さんから、ポートレートを撮ってくれと言われた時に、表情を見た時に3年後、5年後、この人は長く生きられないというのを読み取れた時に、そうしてしまうかもしれないね、ひょっとすると。

田中： その時に読み取れたものを、切り取るという感じですか？

和田： でもいいし、愛情でもって表現して……なのかもしれないですけど。

田中： 面白い。そういえば昔の手段って、絵画ですもんね。

和田： そうなんです。写真が出てきてから、写実じゃなくなるんです、絵画は。抽象画が増えるんです。ムンクとか。ピカソみたいなのも、ルネッサンスの時代にはありえない。写真がないから。被写体そのものを捉えるっていうのは、写真に任せてる時代が変わっていったんです。

田中： 絵画としての役割が変わったっていうこと？

和田： ですね。そうなった時に違うタッチで行かざるを得なくなった。ぼくらは動画が出てきたことによって、ぼくらならではの切り口でもって攻めて行かないと、動画に変わられる可能性が十分ある。変な話、コマドリでいいわけだもんね、ぼくらは。その瞬間瞬間を撮ってる。よくこの瞬間を撮ってるなって。

田中： そう。決定的瞬間ってね、衝撃ですよ。ファインプレーの瞬間とかね。

和田： そうですね。その瞬間を切り取るのは、報道カメラマンの人たちが一番うまいですね。圧倒的に、その瞬間、一瞬で集中力がMAXに上げられる瞬発力があると思いますよ。あと、その瞬間、スローモーションに見えてる人もいるわけですね。

田中： あー。

和田： 変な話、マトリックスの世界に行けるんですよ。「弾丸見えてるよ」みたいに（笑）

田中： あははは。古い話で、全盛の頃の川上さんが「球が止まって見える」って。そんな感じですか？

和田： そんな感じですよ。ばーんって集中すると、マトリックスの世界に行ける。

田中： よく交通事故に遭った時、場面がスローモーションに見えるって聞きますけど。

和田： そうそう。それですよ。何かで読みましたけど、通常は脳の処理が30%までしか使えないんですよ。走馬灯の世界は脳の処理が100%まで行けるんで、1秒が3秒になるんです。そういうからくりです。

田中： すてきー。

和田： だから一気に、バツと処理できる。それがマトリックスの世界。裏の脳科学みたいなのを知っていると、すげー面白い、あの映画。「解き放て」（笑）

田中： あはははは。

和田： 「ネオ、解き放て」って（笑） 解き放つとリミッターが解除される。弾丸も止まって見えるし、相手の先を行ける。

田中： 面白いなあ。

人としてこれは譲れないっしょ??っていうのがあるとしたら、何ですか。

和田： 礼儀ですね。儒教的にいうと。

田中： 「攻め」と「守り」自分はどちらだと思えますか。

和田： 今は攻めですね。ひと昔はディフェンスもしてましたけど。攻めと守りは表裏一体なんで。「攻撃は最大の防御」って言いますしね。なんだろ、守りを意識せずに攻めてるのか、守りを考えた上の攻めなのかは、大きく違うと思います。意識した上での攻め。

．．．．． つづく ^^

田中： 全く何の制約もないとしたら、何をしますか。

和田： 制約がない？

田中： うん。

和田： 世界の音楽を、楽しみたい。

田中： FB（フェイスブック）でも結構、音楽のこと、書かれていますよね。

和田： はい。世界の音楽、愛してますね。ほんとは写真と動画を組んでって考えてた時に、音楽家の支援をしたいなって。

田中： へえ。

和田： あと、お店の支援をしたい。アイルランドのパブみたいに、音楽と酒がうまく、こう、がちゃがちゃしてる感じがあると、日本も豊かになるなあと。日本は著作権協会ってあって、それがぼくがやりたいことを、遮ってくれてて。

何の制約もないとしたら……というところで。ビジネスとしてでもやりたいし、それは世界にも広げられる仕組みなので、「やりたいなー」って思ってます。逆輸入しようかな。

田中： 世界の音楽を。

和田： 世界の音楽でもいいし、楽しめる大衆音楽、クラシックとはちょっと別ですけど大衆音楽であれば、融合してってみんなで楽しめる。音楽を中心とした生活を、みなさんにしてもらいたいな。それは世界に対して……。そういうことがやりたい。

田中： いけそうじゃないですか？（笑）
聞くとムカッってくる言葉ってありますか。

和田： なんだろな。イライラするって宣言されて、どうしようもないなって時は、ムカッてきますね。

田中： あんまりムカッとか、イラッとかしなさそう（笑）

和田： しないですよ。

田中： 常に状態管理出来てるから。

和田： そう。管理出来てるから、ないですね。聞こえてないんだよな、そういう声は。通過してるし。間違いなく。そういう環境にいない。常日頃から、自分のプラットフォームにそういう言葉が聞こえる人はいないようにしてるから。いるようになれば、ステージを変える、場所を変えるということを常にやるので。

田中： 悪い芽は小さいうちに摘む……のような。

和田： そうですね、そんな感じ。だから、電車を使わずに、自転車を使うのも、電車に乗ればいろいろな人の声が聞こえてくるんだけど、自転車で聞こえるのは、同じ速さで走ってる人の声だけ、みたいな（笑）

田中： 聞こえるのは、風の音だけ。

和田： ぼくにとってのノイズは、生活の中ではあんまりない。

田中： 落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか。あんまり落ち込まなさそう……。

和田： いやっ。結構、落ち込む。落ち込みます。思う写真が撮れないって話をしてたと思うんですよ。ずっと、落ち込む時があるんですよ。スランプ。

田中： スランプですか。

和田： めちゃくちゃあるんですよ、スランプ。何かの拍子に、突然、「あれ？」って。全然違う。画像で直しても直せない……と思って、落ち込むんですね、もの凄く。それはスランプじゃなくて、自分の頭の中の画が、上に行っちゃったんです、先に。

田中： うん。

和田： 頭のイメージが先のうまい画の方に行ってしまうって、技術力がついてきてないことに気づかないんですよ。技術力より、イメージの方が上に行っちゃってるんです。

田中： そのギャップが。

和田： そのギャップに気づくことが、あるタイミングで起こるんですよ。そうすると、スラ

ンプになるんで、落ち込むんですね。もの凄く。ひたすら、我慢（笑）

田中： それは自然に浮上してくの？

和田： ああ、そうです。ある瞬間に、さっき言ったみたいに、非のつけ所のない写真が撮れる時にクリアとか、「技術的にこうやればいいんだ」ってわかった瞬間にクリアできるので、それまでは、ひたすら我慢。試行錯誤です、ずっと。

田中： なんか、その間って、スランプっていうよりも、情報処理してる感じがしますね。

和田： そうですね。トライ&エラーをずーっと繰り返してて。「これでもない、これでもない」って。

田中： そう。なんか落ち込みっていうよりも、その処理をしてる時間って気がする。パソコンなんかでも、止まってるんだけど、裏ではガーッと動いてて。そういう感じがした。答えがポンって出れば、そこで切り替えられるっていうことは。

和田： そうなんだ？ 落ち込んでないんだ、本当は。

田中： うん。気持ち的には。

和田： そう思わないですもんね（笑） 落ち込むっていうのは下に落ちることを言うんだから。

田中： うん。

和田： 落ち込まないな。そうやって考えると。

田中： だから、答えがあるっていう前提の。

和田： 目標値と現状。

田中： うん。だから「そこんこの答が出るまで、とりあえず座ってる」みたいな。落ち込むって言うと、どよーんとしちゃうような。それとは違う感じがします、はい。

何をしている時が一番楽しいと感じますか。

和田： 最近は子供とじゃれてる時が、楽しいですね。

田中： 今一番欲しいものは何ですか。

和田： 健康かな。

田中： あなたの萌えポイントを教えてください。

和田： 萌えポイント?? (笑)

田中： この質問、その時、頭の中に何が浮かんだかで、変わってくる。何が思い浮かんだ？

和田： 何かなあ。おねえちゃんのことを飛んで来たので、おねえちゃんの事で萌えてます (笑)

田中： あはは。

和田： ひとりだったら、答えが違ったかもしれない (笑)

田中： 今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語ってください。

和田： 独立したことと、結婚？再婚？したこと。

田中： 今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか。

和田： 周りの人への信頼かな。

田中： 信頼？

和田： 信頼されてるから、動けるみたい。要は、「信号が青だよ」ってみんなが言ってくれてるんで走れる。いろんな人が、信号を青にしてくれてる感じがする。

田中： じゃあ、止まれないですね。

和田： 止まれないですね。上りかな (笑) 下りじゃないな、全然。

田中： そこで見える景色も、格別な気がしますね。

和田：　そうですね。結構な早さなんでね。だいぶ先を見てないといけない。

田中：　今死んでも悔いはありませんか。

和田：　はい。いつ死んでもいいように、常にしてるってありますね。

田中：　身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか。

和田：　アイルランドって、毎日ギネスですね。「楽しい終わりを迎えようかな」って。

田中：　世界に向けて演説をしたら、何を一番伝えたいですか。

和田：　音楽が平和をもたらす。

田中：　音楽っていうものが、とっても大きいものなんですね。

和田：　凄く大きいものですよ。

田中：　ひょっとしたら、音楽というものを活かすためにカメラというものを。

和田：　やってるかもしれない。

田中：　人間以外のものに生まれ変われるとしたら、何がいいですか。

和田：　犬かな、ぼくは。小型犬。ポメラニアンみたいなのが好きだな、撮ってても。

田中：　小さいところが好きなの？

和田：　いや、ちっちゃいんですけど、結構高飛車なところがあるんですよ、彼ら。

田中：　ツンデレ？（笑）

和田：　そう。つんつんしてるところもあって「おまえ、ちっちゃくせに」って内心笑えるところもあるんですよ（笑）

田中：　世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、何を消し去りますか。

和田： お金だな。あんまり要らないな。物々交換でいいんじゃないかな。

田中： 自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、教えてください。

和田： さっきのターボ車の話ですね。暖機運転がちょっと必要（笑）

田中： 自分のキャラを一言でいうと、「ターボ車」？

和田： ポルシェ。かっこええー（笑） 見た目ええ感じだもん、だめだな（笑） 911の昔のクラシックぐらいがいい。見た目ちょっとポンコツだけど。

田中： どっちがいいの？

和田： ポルシェ997。ポルシェですね。

田中： 羊の皮を被った狼ってことで。

和田： 『能ある鷹は爪を隠す』みたいな。鳥もいいな。生まれ変わったらね。大鷹とかいいです。厳しい。上に立つものをよくわかってる。

田中： 孤高の王みたいですね。

和田： 産まれて間もないのに、「こいつは長く生きられない」って思ったら、捨てに行っちゃうからね。

田中： それって一種の帝王学？

和田： です。凄く大切。

田中： 今一番大切に思っている事（もの）って、何ですか。

和田： 時間。

田中： 今日のこの時間で、何か気付いたことがあったら教えてください。

和田： 落ち込んでないってことですね（笑）

田中： あはははは。「落ち込んでなかったんだ」って（笑）

和田： 落ち込んでなかったってことは、衝撃だなあ。

田中：ほんとに??（笑）

和田： うん。うん。自分の中で落ち込んでるって、「スランプだからって落ち込むべきことだ」と思ってたんですけど。「下がってなかったんだ」って思うと、「なるほどな、確かにそうかも」という感じ。落ち込んでなかった。

田中： それに気づいて、どんな感じ？

和田： ま、よかったかな。もがいてんだな、必死に。上に上がる階段ないな、みたいな感じ。

田中： 気づかれたっていうのが、なんか先に行くための、重しがひとつなくなった感じがしますね。

和田： そうですね。うんうん。

田中： 落ち込んでる、そういう状態って、足踏みだったり、重いですからね。それが、実は違ったんだなって。

和田： 沼にいたと思ってたのに（笑）「下、あるある」みたいな。溺れてんだけど。

田中： 足つくじゃん（笑）

和田： あー、ほんとーみたいな。そういう感じ。

田中： ありがとうございます。楽しかったです。

和田： よかったです。

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。

少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、

『コーチング』 という専門職の顔も持っています。

実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、

おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、

クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクール

でCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約550人のコーチがCPCCの資格を取得し、世界中では6,900人のコーチがこの資格を持って活躍しています。（2014年6月現在）

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学 『NLP（神経言語プログラム）』 も学び、

米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。

このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、クライアント様の変化変容、

目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に

「本当に生き甲斐のある人生とは何か」 を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。

今なら1回60分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

< ace-support@samba.ocn.ne.jp >

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版

記者兼編集長 田中永子

ハタラクヒト＊ペディア 9 < 和田英士 氏 >

<http://p.booklog.jp/book/79374>

著者：田中永子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/24riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79374>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79374>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ